

日本文学(近代文学)講義 第12回 反政治主義の模索

反政治的大同団結

政治主義＝文学は政治主張の道具である

プロレタリアの解放＝目的

手段＝文学・映画・絵・童話・歌……

反政治主義＝文学は政治の道具ではない

でも…文学の内実(主義主張)はバラバラ……

でも…政治主義だけはやっつけない!

大同団結＝細かい差異は捨てて大きな
目標のために一致団結!

ヨーロッパと第一次大戦

二十世紀初頭から第一次世界大戦後

- ①、没落への怨念と不安
- ②、戦争に対する危機感
- ③、社会主義への恐怖
- ④、資本主義の矛盾の深化

これまでの近代的形式を根本から破戒する芸術＝前衛芸術
未来派、立体派、表現主義、ダダイズム、シュルレアリズム

- ①、新堀口大学訳、ポール・モーラン『夜ひらく』
「ダリヤの花が一輪私の開いた口へ入って、やうやく咽喉
でとまった。花合戦。花園が空中をとんだ」
- ②、ドイツ表現主義の映画『カリガリ博士』
- ③、ゲオルグ・カイザーの『カレイの市民』

カリガリ博士の実験



図1: 斜めになっている歪んだ壁と、それに伴い斜めになったドア



図2: やはり斜めになっている家の屋根と、斜めになったカメラ。アイリスショットの使用。



図3: チェザーレの目の周りのメイク。アイリスショットの使用。



図4: カリガリ博士の強迫観念を、手書きで表現



図5: 図の中で三箇所、文字が描かれ、強迫観念を表現



図6: アイリスショットで不安感とスピード感を強調。路地は斜めになっている。



図7: 部屋の中のシーン。奥の窓から日光が射しているが、照明である。背もたれの高すぎる椅子。



関東大震災

大正12年(1923年)九月の関東大震災

一夜にして近代国家日本の象徴である首都東京の消滅

- ①、『新潮』『早稲田文学』『文芸春秋』『明星』『白樺』などそれまでの有力雑誌の休刊・廃刊 **世代交代の契機**
- ②永井荷風「江戸の文化の名残を煙とし、明治の文化を灰としてしまった」
- ③菊池寛「結果において一つの社会革命であった」
- ④横光利一「日本の国民にとつては世界大戦に匹敵」

『文芸時代』の刊行

関東大震災の年の10月

創刊の辞(川端)

「我々の責務は文壇に於ける文芸を新しくし、更に進んで、人生における文芸を新しくし、或いは芸術意識を本源的に新しくすることであらねばならない」

「地震が既成文芸の終点であり、新文芸の起点であることは確かであらう。地震前派地震後派と云った風の言葉が生きた意味を持つやうになるかもしれない。そして我々は、これを機会に一層露骨に大胆に既成文芸に対する不満を述べ、新文芸の要求を明らかなる形で提唱すべきであらうと思ふ」(『余蘆文芸の作品』)

「大正十二年の大震災が私に襲ってきた。そして私の信じた美に対する信仰は、この不幸のために忽ちして破壊された。新感覚派と人々の私に名づけた時期がこの時から始まった。眼にする大都會が花々とした信すべからざる煉瓦原となって周囲に広がっている中を、自動車といふ速力の変化物が初めて世の中をうろろうとし始め、直ちにラヂオといふ声音の奇形物が顕れ、飛行機といふ鳥類の模様が実用物として空中を飛び始めた。これらはすべて震災直後わが国に初めて生じた近代科学の具象物である。煉瓦原にかかる近代科学の光線が暗黒と形となって顕れた青年期の感覚は、何らかの意味で変わらざるを得ない」(『解説に代えて』)

千葉亀雄の命名

「新感覚派の誕生」

「これ(技巧に走りすぎな点)はまた立派にこれでよいのである。現実を単なる現実として表現する一面に、さやかな暗示と象徴によって、内部人生全面的の存在と意義をわざと小さな穴からのぞかせるやうな、微妙な態度の芸術が発生するものも自然の約束なのである。さらば、なぜ、彼等が人生を表現するに、わざわざ『小さな穴』を撰ばねばならぬかといふならば、彼らが大きな内部人生を象徴させるために使った、その小さな外形は、有りやうは、彼等が端的に刺激された、刹那の感覚の點出に過ぎないからである」

「いはゆる『文芸時代』派の人々の持つ感覚が、今日まで現はれたところの、どんなわが感覚芸術よりもずっと新しい、語彙と詩とリズムの感覚に生きて居るものであることはもう議論がない」

新感覚派

政治主義 雑誌『戦旗』『文芸戦線』

反政治主義 雑誌『文芸時代』

新感覚派＝大正末期から昭和初期の文学の一流派。1924年(大正13)年に創刊された同人誌『文芸時代』を母胎として登場した新進作家のグループ、文学思潮、文学形式をさす。大正・昭和期の評論家、ジャーナリストの千葉亀雄が同人の言語感覚の新鮮さにいち早く注目し、『文芸時代』創刊号の印象を『世紀』に発表。「新感覚派の誕生」と命名して以来、文学史用語として広く定着した。『文芸戦線』のプロレタリア文学派とともに、モダニズム文学として、大正後期から昭和初期にかけての大きな文学潮流となった。

新感覚派の特徴

「伝統的な私小説リアリズムの否定」**自然主義批判**

「言語表現の独立性を強調」**政治主義批判**

近代的個人主義

「近代という状況・感覚・意識を基調として主観的に把握」

「知的に再構成した新現実を感覚的に置換・創造する作風」

創立同人は、横光利一、川端康成、片岡鉄兵、中河与一、今東光など十四名

新感覚派の文体

横光利一「頭ならびに腹」『文芸時代』創刊号

「真昼である。特別急行列車は満員のまま全速力で馳けてみた。沿線の小駅は右のやうに黙殺された。」

「太陽は銃口の先で輝きながらきりと廻転した。一個の思惟が光線と等速度をもって太陽に逆行した。一瞬、二〇万年の倒逆の歴史が銃口の先端へ集合した」(「園」)

「今日は昨日の続きである。エレベーターは吐瀉を続けた。チョコレートの中へ飛び込む女。人波は財布とナイフの中を奥へ奥へと流れて行く。缶詰の谷と靴の塵。リボンとレースが花の中へ上っている」(「七階の運動」)

- ①客観的現実を感覚的、主観的に把握
- ②それを奇矯とも思える比喩を駆使
- ③センテンスを短く切って場面を転換していく

VSプロレタリア陣営(プロ・モダ論争)

1927年(昭和3)～1929年(昭和4)初期

プロレタリア文学派と新感覚派との間に「形式主義論争」

プロレタリア 内容が大事

新感覚(モダニズム) 形式が大事

中河与一「鼻歌による形式主義理論の発展」

「形式以前には絶対に内容あり得ない」

横光利一「文芸時評」

勝本清一郎の『Y製鉄所の映画』を取り上げ、中産階級の動揺と資本家階級の専横を教科書どおりに書いているが、少しも迫るものがないと批評。次いで、平林たい子の『破る』について、その内容は平凡で古風なものにすぎないのに、強い力をもって読者に迫ってくるのは、「作者平林たい子氏の芸術的表現が、フォルマリズムに侵入して来たが故である」という。ここから直ちに、「平林初之輔氏や、蔵原惟人氏の云ふやうに、内容が形式を決定すると云ふ理論は、此の作で見事に転覆されねばならぬ」と結論し、平林と蔵原の批判に移っている。

平林や蔵原の理論は大人だ！

蔵原「芸術運動当面の緊急問題」(大衆に理解され愛される文学)

「芸術はイデオロギーであると共に技術である。内容であると共に形式である。そして形式が内容に決定されることが事実であるとするならば、その形式が内容から自然発生的に生まれて来ないことは事実だ。芸術作品の形式は新しい内容に決定された過去の形式の発展としてのみ発生する」

平林「文芸批評家の任務について」

「形式の独自性についての主張は、内容の独自性が必然に、形式の独自性を要求するのであるからここで論ずる必要もない程自明の真理である。従って、形式の硬化並びに、形式を駆使する能力の貧弱等は、作者の重大な欠点であることは勿論である。それと同時に、わざわざ形式の新奇をてらった言はは形式が内容に先走ること警戒しなければならぬ。内容と形式とは決して分離してはならぬ」

大人の理論である！

ガキな横光の理論

「ここに平林初之輔と云ふ名前をとれ。もし此の前頭の一字なる『平』を『山』と置き換へよ。直ちに、平林初之輔は、忽然として、山林初之輔となって変形する。さうして、最早、此の山林初之輔は、決して優れる批評家、平林初之輔ではないのである。即ち一字の文字がかくのごとく内容を変形したと云ふことは、全く形式が内容を決定したと云ふ現実上の事実である」

おいおい、固有名詞は「形式」じゃないだろう……

若い世代の賛同

高見順『昭和文学盛衰史』

「私たちは、あの『文芸時代』の創刊号をどんなに眼を輝かして手にしたことが、(中略)私は『文芸時代』を買って本を出さずには置いて、歩きながら読んだ。ここに、私たちが若い世代のなかで求めていた、湧き出ていた文学が、初めて現れた」

片岡鉄兵『若き者たちに語る』

「急行列車と、小説と、作者自身の感覚との関係を、十数字のうちに、効果強く、凝縮と描写を込め意識したのである。効果強く、凝縮し！ 繰り返し、汽車という物質の状態を表はすに、感性的表現の他の何物も能く深刻と効果強く表現と成り得よう。物質のうちに作者の生命が生き、状態のうちに作者の生命が生きてるための交渉の、最も直接にして現実的な場面は感覚である。その他の何物でもない」

「彼自身の感覚を、所謂一般常識的な感覚の外に際立たしめる事こそ、物にぶつかって火花の如く内面に散るが如く、外面的に光輝せしめる手段であったのだ」

稲垣足穂『末精神証又し』

新時代の文学にはそれにもなほふいはゆる『健全』がなければならぬと考へるのは迷信である。この楽園においては『不健全を排す』という、言葉がすでに排されるべき一つの不健全にぞくしている。アレンクアデス、現象論、科学主義、末精神論を否定するものと同じである。そのいはゆる類型的でも、みずから許したこの第十の絶対的自由を確信する吾々にとっては、十九世紀風の空疎な概念などよりはるかに健全なためである

旧世代の抵抗

生田長江『文壇の新時代に与ふ』

(モーランの)「あの口からは鎖を吐き出し、尻尾は猴子になっている習慣といふあの獣を」とか、「水を飲み飽きた歩道に浴つて、不具の並木が吹きさらされていったとか、「桑の実が万年筆を食べたやうな哀なる舌をたたりと垂れて」というやうな直喩や擬人や連想的暗示を用いた技巧の例を引いて、ここには目先が変わっているだけで、弊に新しい感覚などはないと言ふ。

広津和郎『新感覚派に就いて』

「治験の小説は石のやうに熱殺された」という一行をもつて感性的手法の勝利を云々することはできない、この一行と全体との有機的関係を論じなければならず、さらに作品そのものの新時代にふさわしいものであることを説明しなければ、感性的手法の勝利など言えることではないと批判。
『感性的享楽』の人生観を掲げ獅子吼しやうとするためには、人生のもろもろの活動についての、もつと深い観察がなければならぬ、そまで行かなければ、『感性的享楽』の人生観に力は湧いて来ない。唯その主題の下に集まって来るのは、怠惰者と、生活力の弱い、人生に直面出来ない人間共ばかりだらう。インジゴオングなフリステインだけだらう。日和見的な、享乐的オポポチュニストのための弁護に、君の雄弁を役立てては行けない

年譜でみる横光利一①



1898年(明治31年)3月17日、福島県北水津郡東山村大字湯木川向(今の東山温泉)で、父・梅次郎、母・こぎの長男として生まれる。1914年、早稲田大学英文科に入学するも文学に傾倒し除籍。再び政治経済学科に入学するも中退。

1921年頃から菊池寛に師事し、また川端と出会い以後生涯の友となる。処女作『御身』を書くがこの時は発表せずにいる。

1923年、菊池の推挙により同人誌『文芸春秋』同人となる。同5月、同誌にて『魂』、『新小説』に『日輪』を発表する。

同9月に関東大震災が起きたため、この時期に出た作家は震災後作家としてではやされた。同人仲間・小島島崎の妹・君子と結婚する。

1924年、「御身」と『日輪』を刊行。川端とこれに、今夏光、中河与一、稲垣足穂と新進作家を結集して『文芸時代』を創刊する。『文芸時代』が文学界の中心となり、この雑誌は新感覚派の拠点となる。横光は新感覚派の大家と呼ばれるようになる。

1926年、妻・君子を妊娠によって喪う。このころの二人のことは『春は馬車に乗って』『花園の思想』などに書かれている。翌年、且向千代と再婚。

年譜で見る横光利一②

芥川龍之介の最後の時、「君は上海に行くべきだ」と言われ、1928年に約1ヶ月上海に滞在する。これにより『上海』を執筆し始める。連作長編の形で執筆されたこの作品は、内容的には1925年の五・三〇事件を背景とし、上海における列強ブルジョアと中国共産党、押し寄せるロシア革命の波と各国の愛国主義といった諸勢力の闘争を描いた野心作であると同時に、形式的には新感覚派文学の集大成であり、新心理主義への傾倒の兆しもみられる問題作であった。

大正末期から昭和初期のこの頃、芥川をはじめ、吉行イヌケ、村松梢風、金子光晴などが上海を訪れている。また内山完造の経営していた内山書店には魯迅をはじめ、中国や日本の文学者が多く集まっていた。

1930年、町工場の人間模様を実験的手法で描いた『機軸』を発表する。1932年、新感覚派の集大成といふべき『上海』と『機軸』を、1934年には『機軸』を刊行。

翌年、『純文学にして通俗小説、このこと以外に、文藝復興は絶対に有り得ない』と説く『純粋小説論』、それを表行した『家族会議』を発表する。『純粋小説論』はこの頃に翻訳が出たアンドレ・ジイドの『賈金つくり』が影響している。

1936年、半年間、ヨーロッパを旅行する。行きか船では高浜虚子や宮崎市定がいて、句会をしはひらひらしていた。出発直後に二・二六事件が起る。ヨーロッパでベルリンのオリエンチックや、パリでの人民戦線政府への激動を直接体験する。この経験をもとに、翌年から『旅愁』の連載をはじめめる。

年譜で見る横光利一②

又、このころから段々と太平洋戦争の影が文学界にも影を落としてくる。世相が戦争に向かう中、国際主義的傾向を強めてゆき、文芸戦後運動に加わる。また、1943年5月31日付の、海軍に採用され報道班員となった書類が残っていて、1943年4月にニューギニア派遣の話が実現す前までいたが、病気で中止だったと、親しい人に書簡で伝えている。しかし、その後、1942年の初夏と1943年8月の2度ほど、ラバウル近辺に派遣されていたことが、坂井三郎の証言で明らかになっている。このことより敗戦後に文壇の戦犯と名指しで非難されることになり、横光の評価を激してこぼれこぼれになる。

1945年6月、山形県に疎開。疎開先で健康を害する。敗戦後、婿宮、翌年、『旅愁』四篇を刊行する。西洋の思想と日本の古神道との対決を志したこの長編は、盧溝橋事件の勃発までを書いたところで未完に終わってしまった。

1947年、疎開時の日記という体裁をとった小説『夜明けの魂』発表。絶筆となったのは、母の実家にあったアリアンを通して青年時代の相棒で思いを書いた『岸屋(ランフ)』で、執筆中の12月30日、49歳で急性心臓炎のため死去。

翌年1月3日に葬儀が行なわれる。川端は市井で「君の名に替えて僕の名の呼ばれる習わしも、かきみればすでに二十五年を超えた」と常に川端の名前が横光の後に挙げられることを述べて、「君に書かされた僕のみしは君が知ってくれるであらう。君と、君後に会った時、生死の境にたゆたふやうな君の眼差しの無限の懐かしさに、僕は生きて二度とはいかでめぐりあへるであらうか」と早すぎる別れを惜しんだ。同年、遺作である『微笑』が発表される。

墓は東京都府中市の多磨霊園にある。法名は、光文院釋雨過。

川端 康成

川端 康成

1899年(明治32年)6月14日

- 1972年(昭和47年)4月16日



大阪府大阪市北区此花町(現在の天神橋付近)生れ。東京帝国大学文学部国文学科卒業。菊池寛に認められて文壇入り。横光利一と共に『文藝時代』を創刊し、新感覚派の代表として活躍。『伊豆の踊子』『雪国』『千羽鶴』『古都』など日本の美を表現した作品を発表し、1968年に日本人初のノーベル文学賞を受賞した。1972年、ガス自殺した。

『古都』は、典型的な双子小説

『だんだん』(2008年9月29日に放送を開始した第79作目の連続テレビ小説)主演は双子の三倉実奈・佳奈。2人は1996-97年に『ふたりっ子』で、すでに朝ドラのヒロインの子供時代を演じた経験があり、そうした俳優が、また別作品でのヒロインを演じるのは史上初である。

三倉実奈演じる田島めぐみが、京都へ進学したことをきっかけに三倉佳奈演じる一条のぞみと一緒に住むことになる。2人でデュエット歌手としての道を歩んでいくが、やがてそれぞれのやりたいことを見つけ別々の新しい一歩を踏み出す。

『ふたりのロッテ』(Das doppelte Lottchen)は、児童文学者エーリッヒ・ケストナーが1949年に発表した小説。元はナチスドイツ時代に当局に盗まれていたオーストリアが愛名を用いて映画の脚本として書いたものであったが、後に当局に発覚して製作が中止となり、戦後になってから公

オーストリアのケーンツェル湖畔にある「こどもの家」には、毎年夏になると多くの子供たちが国内各地からやってきて、夏休みを過ごす(サマーキャンプ)。ウィーンから来たルイーゼ・ハルブとミュンヘンから来たロッテ・ケルナーは、お互いがおまわりにも似ていることに驚き、仲良くなる。そして、互いの生まれた日や生まれた場所が同じ事から、自分たちが実は双子であり、夫の浮気疑惑から離婚した両親が、子供を、互いにそっくりは教えず一人ずつ育てていたということを知る。両親を仲直りさせ、家族4人で一緒に暮らせるようにするために、双子はある作戦を実行に移すことになる。

まとめ

新感覚派

当時、プロレタリアに対峙した最大派閥であった

もちろん、反政治的文学養護派には賛否両論あった

新しい新興前衛芸術の影響下に新たな表現を模索

内容よりも形式を重視する文学観

川端は独自の路線で戦後にノーベル賞

『伊豆の踊子』

『伊豆の踊子』1926年1、2月に「文芸時代」に発表され、同年金星堂刊。

湯ヶ島、天城峠を越えて下田に向かう旅芸人一座と道連れになった、孤独に悩む青年の淡い恋と旅情を描く。6回も映画化されている人気作品で、ヒロインの踊り子かおるは田中絹代から山口百恵まで当時のアイドル的な女優が演じている。

名作『雪国』

『雪国』(ゆきぐに)は、川端康成の長編小説で代表作の一つ、1935年以降、『文藝春秋』改訂などに分載された。

- 12月始め、主人公の島村は鉄道で雪国に向かい、車中で兩人らしい男と一緒にいる娘・葉子に興味を惹かれる。島村が降りた駅で、その二人も降りた。旅館に着いた島村は以前に会った駒子を呼んでもらい、朝まで過す。
- 駒子に会ったのは新緑の5月。山歩きをした後、島村が初めての温泉場を訪れた時のことである。芸者の手が足りなかったため、島村の部屋にお酌に来たのが19歳の駒子であった。次の日島村が、女を世話するよう頼むと駒子は断ったが、夜になるにつれて島村の部屋にやってくる。二人は一夜を共にしたのだった。春の歌舞中、街頭で出会った駒子と再会し、住んでいる部屋に寄ってみると、朝の家の屋根裏部屋であった。車内で見かけた二人は師匠の息子(行男)と娘(葉子)だったことを知る。行男は母屋で長くない命だと言う。その後、旅館へ戻り、夜、駒子は行男の評者で、芸者歌のため芸者に出たところ(たまたま、本人は評者ではない)を否定する。滞在中は毎晩駒子と過す。島村は三味線の音に感動を覚えたりする。島村が帰る日になって、行男が危篤だといふ葉せが入るが、駒子は死ぬところを見たくないと言ひ、島村を駅まで送る。
- 翌年秋、島村は再び温泉場を訪れる。駒子が来て、2月に来る約束を破ったことになる。その後、行男が亡くなり、師匠も亡くなったと聞き、島村は駒子と墓参りに行く。墓地で葉子に出会うと、駒子の機嫌が悪くなる。
- 駒子は毎日島村の部屋に通ってくる。ある晩、葉子が駒子からの伝言を持ってくる。島村は葉子にも魅力を感じる。言葉を変えず。葉子は、東京へ連れて行ってほしいという。葉子が帰った後、駒子が来たので家まで送ってゆく(今は葉子の家を出て、湯ヶ島屋の2階にいる)。再び二人で旅館に戻り、酒を飲む。島村が「いい女だ」と言いと、その言葉に聞き覚えがあった駒子は泣く。
- (同じ年?)島村は家財を売ったように、冬の温泉場に逗留を続ける。ある夜、映画の上映会場になっていた舞台(兼芝居小屋)が火事になる。人垣が見守る中、葉子が舞台の2階から投げ出される。駒子は葉子を抱き止める。